

2021
10/9(土)
12/12(日)

喫茶の碗の物語

— 中国陶磁への憧れ、そして —



AICHI
PREFECTURAL
CERAMIC
MUSEUM

主催：愛知県陶磁美術館
特別協力：東京国立博物館
協力：文化財活用センター

令和3年度 地域ゆかりの文化遺産を活用した展覧会事業



喫茶の碗の物語

茶の湯の焼物で喫茶の碗は特別な器です。亭主が客の前で茶を点て、それを客が喫する。その間に碗だけが亭主と客との間を行き来し、それぞれが手にするものであるからです。

だからこそ喫茶の碗は、茶の湯が始まると、大きく変化を見せていきます。茶を喫するためだけではなく、亭主と客とに共有されることに大きな意味が生じ、茶の湯のための碗が新たに見出され、そのための碗が作り出されていきました。こうした動きを、「天目」と「茶碗」と、喫茶の碗を二つの視点から見えていきます。

寺院では抹茶の喫茶法とともに伝えられた天目が主役となりました。喫茶が広まると茶碗も使われるようになっていきます。茶の湯が始まると、天目と茶碗の双方で侘びの価値観によって選択が行われていきました。天目では建蓋から灰被という変化であり、茶碗では、中国産の唐物から、朝鮮半島産の高麗物へとという展開でした。そして和物茶碗。千休休は自らの茶に適う茶碗を作らせることで、和物茶碗の世界で創造の扉を開きます。

瀬戸や美濃は、そうした動きに最も敏感に反応した窯場でした。瀬戸が唐物天目を写して和物として先頭を切り、続いて瀬戸・美濃が軌を一にして茶の湯のための茶碗作りへと進んでいく。そして桃山時代には美濃が和物茶碗の創造の最前線を進みます。

そんな喫茶の碗の物語を、中国陶磁への憧れから、茶の湯とともに始まる選択の時代へ。さらに桃山時代に起きた和物茶碗の爆発的創造を、そして江戸時代、喫茶の碗として天目と和物茶碗とが辿った異なった道までをご覧ください。

愛知県陶磁美術館 本館2階 第3展示室

青磁蓮弁文茶碗 東京国立博物館、大井戸茶碗 有楽井戸(重要美術品) 東京国立博物館、黒楽茶碗 銘 尼寺 長次郎 東京国立博物館 各部分 Image:TNM Image Archives

和物茶碗

和物茶碗の創造は、「碗は円形」という常識を超え、「歪みの造形」へと進んでいく。



黒楽茶碗 銘 尼寺 長次郎 桃山時代 16世紀
東京国立博物館 松永安左工門氏寄贈
Image: TNM Image Archives



志野茶碗 銘 振袖 美濃 桃山時代 17世紀 東京国立博物館
Image: TNM Image Archives



黒織部茶碗 美濃 桃山時代 17世紀
愛知県陶磁美術館 加藤舜陶氏寄贈

くつがた 沓形という形と口縁下のくびれとで、手に寄り添う造形の極致。

高麗茶碗



粉引茶碗 朝鮮時代 16世紀
愛知県陶磁美術館 李吉秀コレクション
10/9-17展示



○大井戸茶碗 有楽井戸 朝鮮時代 16世紀
東京国立博物館 松永安左工門氏寄贈
Image: TNM Image Archives 10/19より展示

十五世紀末、瀬戸・美濃大窯では龍泉窯の青磁蓮弁文碗を灰釉の全面施釉で写します。総釉は量産化ですたれますが、十六世紀中頃、高麗茶碗が登場する頃、再び総釉を意識した茶碗が作られるようになりました。そうした新たな和物茶碗は、茶会記の中で何年かに数例に過ぎないのですが、和物天目とともに登場しています。

そこに始まった桃山の創造を最も果敢に展開したのが美濃です。瀬戸黒、志野と次々と新たな造形を生み出します。織部茶碗はその究極の姿、破格とも評される造形は、利休の目指したものの先に生まれたものでした。

「唐物から高麗物、そして和物」。侘び茶が確立していく中で、茶碗の好みが変わっていくことを示した言葉です。抹茶の伝来で、中国磁器である唐物茶碗は天目に続いて喫茶の碗となりました。茶の湯の開始で茶碗の存在はより大きくなっていきます。天目で建蓋から灰被へと好みが変わる頃、高麗茶碗が登場します。朝鮮産の日常の器、これが侘びの茶に合うものとして、拾い上げられたのでした。

天正十四年（一五八六）、「宗易（千利休）形の茶碗」が茶会で使われると、茶会記で和物茶碗が爆発的に増加します。「今焼茶碗」という茶碗と、「瀬戸茶碗」とされた美濃の茶碗です。利休によって創造の扉が開けられたのでした。茶の湯に適うものが「拾い上げ」られた高麗茶碗に対して、利休は「作り出す」へと大きく踏み出していきます。唐物、高麗物と同様の全面施釉で楽茶碗を作り上げ、そこからさらに「茶の湯のための」造形を進めていきました。「歪み」の造形の始まりです。

唐物茶碗



青磁蓮弁文茶碗 南宋～元時代
13～14世紀 東京国立博物館
広田松繁氏寄贈
Image: TNM Image Archives

精緻な蓮弁で飾られた青磁碗は高く評価された。



青磁蓮弁文茶碗 石川県波佐谷出土
龍泉窯 明時代 15世紀
東京国立博物館
Image: TNM Image Archives



青磁蓮弁文茶碗 龍泉窯系 明時代
15世紀 愛知県陶磁美術館
加藤舜陶氏寄贈

瀬戸・美濃の大窯初期に手本とした粗製の蓮弁文碗。

唐物天目



玳瑁蓋 吉州窯 南宋時代 12～13世紀
愛知県陶磁美術館 太田宏次氏寄贈



藍甲釉天目 瀬戸・美濃・室町時代 16世紀
東京国立博物館 Image: TNM Image Archives

玳瑁とは藍甲のこと。瀬戸・美濃大窯では吉州窯の玳瑁蓋に灰釉の二重掛けによって迫っていく。

鎌倉時代十四世紀瀬戸は鉄釉を開発すると建蓋を本歌として天目を作り出し、喫茶の流行に対応します。室町時代十五世紀末、瀬戸・美濃では従来の窖窯から大窯という新たな窯へとという一大転換が起こります。製品も大きく変わり、瀬戸・美濃の大窯は再び建蓋に照準を合わせ、本歌に迫ります。十六世紀に入ってから侘び茶が隆盛していくと、灰被へと本歌を変え、灰釉二重掛けなどの技法を使って灰被を目指しました。

室町將軍家では曜変、油滴を初めとする建蓋が高く評価。茶の湯の始まりとともに灰被の評価が高まっていく。



灰被天目 南宋～元時代 13～14世紀
東京国立博物館 Image: TNM Image Archives



建蓋 建窯 南宋時代 12～13世紀
愛知県陶磁美術館 加藤舜陶氏寄贈

天目之事

室町時代、喫茶の碗の中で「天目」と「茶碗」とは別のものと考えられていました。高台周辺が土見せ（露胎）となった黒釉の碗が天目で、茶碗とは青磁や白磁の磁器で全体に施釉されているものことでした。

天目は抹茶の喫茶法とともに伝わったと考えられ、鎌倉時代、寺院や武家で喫茶の碗の主流となりました。室町時代には將軍の書院を飾る道具として喫茶具も大事な役割を果たしています。そこで用いられたのが天目で、曜変を最高とし、油滴や建蓋に続くといった評価がありました。茶の湯が始まると、侘びの意識から、建窯産の建蓋よりも、粗製の灰被天目が用いられるようになりました。

和物天目 窖窯の時代

「古瀬戸」の中期、鉄釉が開発されるや作られたのが唐物を写す天目、茶入であった。



天目 瀬戸 室町時代 15世紀
愛知県陶磁美術館



天目 瀬戸 南北朝時代 14世紀
愛知県陶磁美術館

和物天目 連房式登窯の時代

桃山期、茶碗で大きく道を異にした瀬戸と美濃。江戸期、天目で再び同じ道を歩む。



天目 瀬戸or美濃 江戸時代 17世紀
愛知県陶磁美術館

和物天目 大窯の時代

瀬戸・美濃で大窯が導入されると製品も一新される。天目は建蓋写しに始まり、茶の湯の隆盛とともに灰被に焦点を変える。



天目 瀬戸市惣作鐘場遺跡出土 瀬戸 室町時代 16世紀 瀬戸市



天目 石川県小松市波佐谷出土 瀬戸・美濃 室町時代 15世紀末 東京国立博物館
Image: TNM Image Archives

江戸期の茶碗 二つの桃山

仁清の茶碗から桃山の継承と決別とを見ることができま。碗形の穏やかな形状でありながら、正面をわずかに歪ませる所には桃山の香りが。一方正面に描かれた波に三日月の絵は、抽象表現で遊んだ桃山に対し、江戸が異なった世界観であることを示しています。

向付であったのに、黄瀬戸胴紐茶碗は本来懐石具の向付でありました。江戸時代、豪快な造形の織部沓形茶碗に香物鉢とされるものが出てきます。桃山の強さが江戸の茶からはみ出してしまったのでしょうか。おそらく同じ頃、向付の中から茶碗への見立てられるものが登場します。この茶碗のように。



黄瀬戸胴紐茶碗 桃山時代 16世紀
愛知県陶磁美術館 川崎音三氏寄贈



色絵波に三日月茶碗 仁清 江戸時代 17世紀 東京国立博物館
Image: TNM Image Archives

ふれる・まわせる 名茶碗

A Hands - On Look at
Legendary Tea Bowls

8Kで文化財
Cultural Properties in 8K

2021年10月9日(土)~12月12日(日)
Dates: Oct. 9 - Dec. 12

唐物の名碗
その薄さを実感



重要文化財
青磁茶碗 銘 馬蝗絆 龍泉窯
南宋時代 13世紀 東京国立博物館
Image: TNM Image Archives

井戸茶碗の見所を
じっくり鑑賞



重要美術品
大井戸茶碗 有楽井戸
朝鮮時代 16世紀 東京国立博物館
Image: TNM Image Archives

手にしてこそその
和物茶碗の魅力



志野茶碗 銘 振袖 美濃
桃山時代 17世紀 東京国立博物館
Image: TNM Image Archives

8Kで映し出される東京国立博物館の
“ホンモノ”の名碗があなたの手に。
精巧なハンズオンレプリカを回すと
大画面8K画像の碗も一緒に…

特別協力: 東京国立博物館

協力: 文化財活用センター

※重要文化財 青磁茶碗 銘 馬蝗絆 は展示しません。

会場: 本館 2階

愛知県陶磁美術館 名品選

リニューアルオープン

常設展「喫茶の碗の物語・8Kで文化財」、「名品選」、および「リアル謎解きゲーム」
一般400円、高校・大学生300円 特別展・常設展ともに中学生以下無料

日本、そして
世界の人々に

もう一つの
名茶碗
リアル謎解きゲーム
10/10
12/12

Hana * Hana The Magnificent Flowers:
the Four-Seasonal Flowers
and
the Chinese Ceramic History

特別展

華 * 花

—四季の花と中国陶磁史—

2021年
10.9^土
12.12^日

四季を彩る「牡丹」「蓮」「菊」「梅」に焦点を当て、南北朝から清時代にみられる「三彩」「青磁」「青花」「五彩」など多種多様な作品から、「花」の色彩と技法について概観します。また、作品にみられる「花」の象徴する意味、色や状態、呼称等について、中国古典や漢詩の世界観や花の鑑賞史から捉えることで、魅力的な花物語を紹介します。

会場: 本館 1階 観覧料: 特別展「華 * 花」一般900円、高校・大学生700円、常設展もご覧になれます。

五彩牡丹蓮花文壺(部分) 明時代 漳州窯 東京国立博物館
Image: TNM Image Archives

愛知県陶磁美術館

〒489-0965 愛知県瀬戸市南山口町234番地 TEL.0561-84-7474 FAX.0561-84-4932

開館時間 9:30-16:30 (入館は16:00まで) 休館日 毎週月曜日

©当館では、新型コロナウイルス感染症予防対策を実施しています。今後の状況等により、事業内容が変更になる場合があります。